

『イグナティウスの秘密会議』における

Machiavel と Machiavelli

—ジョン・ダンのマキアヴェリ像について—

高橋正平

序

ダンにどのような意図があったのかは推量の域を越えないが、ダンは1610年頃からジェームズ一世を意識し、王を擁護する書を書き始める。1611年出版の『イグナティウスの秘密会議』(Ignatius His Conclave)も極めて polemical な書で、当時ジェームズ一世王朝と対立していたジェズイットをダンが徹底的に風刺した散文である。この書を産み出した歴史的背景についてはヒーリーの詳細な説明があるが、問題はダンがここにマキアヴェリを登場させていることである。マキアヴェリはアレティーノ (Aretino) と共に当時最も物議をかもした人物の一人で、マイヤーはエリザベス朝文学に395カ所のマキアヴェリへの言及を見出し出している程である⁽¹⁾。この膨大な言及について興味ある事実は、いずれのマキアヴェリへの言及もマキアヴェリ自身の著作とは無関係な伝説・伝聞によるものであるということである。それは例えば「悪の権化」「偽善者」としてのマキアヴェリであった。本論の目的は『イグナティウスの秘密会議』に登場するマキアヴェリに対してダンはどのような態度をとっていたのか明確にし、それが当時のマキアヴェリ伝説といかなる関係にあるかに考察を加えることである⁽²⁾。

1

『イグナティウスの秘密会議』は、自称「革新家」が次々と地獄に押し寄せ、サタンの右座という地獄での最高の座をめぐり、「革新家」が各々生前犯した「革新」をサタンの面前で披露するが、終始サタンにつきまとうイエズス会創始者イグナティウス・ロヨラにより反駁され、追い払われ、最後にサタンは自らの座がロヨラによって奪われることを察し、ロヨラを月に送いやるという内容の風刺散文である。ダンの狙いは、ロヨラ一派(過激なカトリック教徒)の悪事をロヨラの口からとうとうとのべさせることにあるが、自称「革新家」の一人にマキアヴェリが登場する⁽³⁾。彼も他の「革新家」同様あえなくロヨラによって反駁されるが、ロヨラのマキアヴェリへの反論は全体の1/3以上も占め⁽⁴⁾、マキ

アヴェリが重要な人物として扱われていることがわかる。論を進めるにあたり、ここでマキアヴェリ自身がサタンとロヨラの前で自己の「革新」を述べる描写とそれに反論を加えるロヨラのマキアヴェリ観を考慮に入れなければならない。最初に、マキアヴェリ自身による自我像から見てみよう。マキアヴェリはパラケルススの後に登場するが、陰険・巧妙な策をろうする人物として登場する。マキアヴェリは彼以前に登場するコペルニクスやパラケルススと異なり、直接サタンに話しかけると同時にサタンのスポークスマンとも言うべくイグナティウス・ロヨラにも巧みに話しかけ、ロヨラの気持ちをなだめ、サタンに対してはロヨラを重視することにより、地獄の王としてのサタンの面目がなくなっていることを知らせようとし、両者の間に亀裂を生じさせようと策を弄する。又、マキアヴェリは、ロヨラがサタンから依頼もされないのに自分勝手にサタンの代理人となり、地獄に押し寄せる「革新家」達を追い払うのを見て、ロヨラに投げるために「何本かの毒矢」⁽⁵⁾を用意したという。ここまでは、「策士家」と「毒殺家」という当時の stock character としてのマキアヴェリが登場し、新しさは見られない。次に、マキアヴェリは生前どのような悪事を犯してきたかをサタンに披露する。

- (1) マキアヴェリの成したことはジェズイットのそれと比べると子供っぽい、マキアヴェリがジェズイットの悪の教義と実践を教えた⁽⁶⁾。
- (2) マキアヴェリは「血の道」を歩み、キリスト教の犠牲よりも異教の血を用いた犠牲を好んだ⁽⁷⁾。
- (3) 君主は宗教を偽ることによりいかに国家を奪い、逆に民衆が君主の圧政の下にあるときはいかにしてその君主を殺害できるかを教えた。その結果、マキアヴェリの教えに従った君主と民衆が続々と地獄に来ることになった⁽⁸⁾。

マキアヴェリのサタンへの売り込みは以上の通りである。陰険なこうかつさ、悪の教師、殺人的マキアヴェリ、無神論者、目的のためには手段を選ばぬマキアヴェリ、王殺し等我々のよく知るマキアヴェリが描かれている。これに対しロヨラから見たマキアヴェリ像は以下の通りである。

- (1) マキアヴェリはおべっか使いである⁽⁹⁾。
- (2) マキアヴェリは、生前中自己の知性だけを信じ、サタンに恩義を感じたりすることはなく、地獄の存在すら信じなかった⁽¹⁰⁾。
- (3) マキアヴェリは神の存在を否定した⁽¹¹⁾。
- (4) マキアヴェリは、ローマ教皇はすべての災いの原因であり、災いの主導者であると確信している⁽¹²⁾。
- (5) マキアヴェリは抗道を掘ってもすぐ敵に見つけられる程で融通性もこうかつさも無い⁽¹³⁾。
- (6) マキアヴェリの著作には何も意味がなく、誰も彼を擁護しようとし無い⁽¹⁴⁾。

- (7) マキアヴェリのほとんどの教えは古くさく、時代遅れである⁽¹⁵⁾。
- (8) マキアヴェリの著作と行為はローマ教皇の破滅と破壊を目指している⁽¹⁶⁾。
- (9) マキアヴェリは国家形態を変え、民衆から自由を奪い、すべての国家を破壊し、無理に君主国に変えようとしている⁽¹⁷⁾。
- (10) マキアヴェリの著作はある場所で短期間のみ役に立つだけで、普遍性がない⁽¹⁸⁾。

このようにマキアヴェリ自身によるマキアヴェリ観とロヨラによるマキアヴェリ観には16世紀からのおさまりのマキアヴェリ観が利用されていることがわかる。エリザベス朝時代からの典型的マキアヴェリは(1)陰険・巧妙な策士(2)裏切りによって相手を毒殺する人物(3)無心論者であったが、この三つの特徴は上に挙げたマキアヴェリ観の一部ともなっている。これらの特徴は16-17世紀の劇作家・詩人による stock character としてのマキアヴェリ像を作り上げるうえで重要な要因となったことは既にマイヤーやプラーツによって指摘されているが⁽¹⁹⁾、1611年に『イグナティウスの秘密会議』を書いたダンも「マキアヴェリ伝説」なるものを受け継いでいることは確かである。特に、マキアヴェリ自身による自我像には(3)の後半を除いて何も新しさがなく、当時のお決まりのマキアヴェリ像に従っている。ここで次の疑問が生じてくる。

- (1) ダンは、「マキアヴェリ伝説」だけしか知らず、それに基づいてマキアヴェリ像を作ったのか。
- (2) ダンは、マキアヴェリを直接読み、「マキアヴェリ伝説」と混合させてマキアヴェリ像を作り上げたのか。

ダンのマキアヴェリ像の由来は(1)かそれとも(2)であろうか。ここで問題になるのはダンの時代にマキアヴェリの著作を読むことは可能であったのかということである。マイヤーは、『君主論』がエワード・ダッカーズ (Edward Dacres) によって1640年に初めて英訳されたから、それまで英国人は直接マキアヴェリの著作に触れることがなく、ジャンティユ (Innocent Gentillet) の『反マキアヴェリ論』 (*Discours sur les Moyens de bien gouverner et maintenir en bonne paix un Royaume ou autre Principaute, Divesezen trois parties; asavoir du Conseil, de la Religion et Police que doit tenir un Prince. Contre Nicolas Machiavel Florentin.*⁽²⁰⁾以下『反マキアヴェリ論』と略記) だけが英国人がマキアヴェリについて知りうる唯一の書であったと言っている⁽²¹⁾。しかし、このマイヤーの見解にはプラーツを始め⁽²²⁾、異論を唱える人が多く、筆者もマイヤーの主張には賛成できかねない。当時、ダッカーズの英訳が出版される前に、英国人にはマキアヴェリの著作に接するいくつかの機会があった。最初に、1580年代のイタリア語版の『君主論』、『政略論』、『戦術論』、『フィレンツェ史』があり、次に『戦術論』と『フィレンツェ史』の英訳、更に『君主論』と『政略論』の手書きの英訳が存在していた⁽²³⁾。これらの事実からラブは、1580年代からマキアヴェリは英国で広く読まれており、イタリアかぶれの英国人だけがマキアヴェリに触れ

ることができたのではなかったと言っている。広くマキアヴェリの著作に接することができた英国人がマキアヴェリをいかに理解していたかをラーブはその『マキアヴェリのイギリスの顔』(*The English Face of Machiavelli*)のなかで述べている。マキアヴェリの評価・受容はいかなるものであったのか。マキアヴェリ研究者にとって特に興味のあるこの問題を追及したのがラーブであり、英国におけるマキアヴェリ受容の変遷を扱った先駆的な書として今日まで依然としてその評価は高い。このように、プラーツやラーブ、最近ではカーン(Khan)²⁴等の指摘によれば、ジャンティユの『反マキアヴェリ論』の英訳が英国における「マキアヴェリ伝説」の根拠であったという説は受け入れ難くなって来るが、それが1577年に英訳され、1602年に出版された事実は否定できない。若い頃より人一倍多くの本を読みあさっていたダンのことであるから、マキアヴェリの著作に接する機会は多くあったと思われるが、ダンが『反マキアヴェリ論』を読んだという確証はない。ヒーリイは、ダンは『反マキアヴェリ論』の被害者ではなかったと言明し、ダンは直接マキアヴェリの著作を読んでいたと言っている²⁵。その証拠としてヒーリイは、『偽殉教者』(*Pseudo-Martyr*)での『フィレンツェ史』の引用、『イグナティウスの秘密会議』における少なくとも一つのエコー、及び『イグナティウスの秘密会議』の論の展開法すべてが『君主論』に基づいていることを挙げ、ダンは、カトリックとプロテスタント双方のマキアヴェリ批判者からマキアヴェリについての知識を得たのではなく、直接マキアヴェリを読んでいたと言っている。確かに、既に触れたようにジャンティユだけが英国にマキアヴェリをもたらしたのではない。さまざまな経路を通してイタリア語や英語でマキアヴェリの著作は読まれたのである。しかし、ダンがジャンティユを読んでいなかったという確証もない。ダンはジャンティユを読んでいたかもしれないし、読んでいなかったかもしれない。直接マキアヴェリを読み、当時流布していたマキアヴェリについての伝聞と混合させて彼のマキアヴェリ像を作り上げたのかしれない。ヒーリイのように、きっぱりとダンはジャンティユを読んでいなかったとは言い切れるかどうかは疑わしい。ダンのマキアヴェリ像とジャンティユの『反マキアヴェリ論』には何も共通点はないのであろうか。この点について以下見てみたい。

2

ジャンティユの『反マキアヴェリ論』は1576年にフランス語で書かれ、翌1577年にサイモン・パトリック(Simon Patericke)によって英訳され、1602年まで出版されなかった。マイヤーによれば、この『反マキアヴェリ論』こそがエリザベス朝劇作家のマキアヴェリ誤解の原因となった書である。ジャンティユが『反マキアヴェリ論』を書くそもそものきっかけは『君主論』が献定された小ロレンツォの娘であるフランス王の母、カトリーヌ・デ・メディシスである。彼女と共に多くのイタリア人がフランスに来、またイタリア文化

をももたらした。「聖バルテルミューの大虐殺」は彼女が引き起こしたと言われ、彼女は他ならぬマキアヴェリの『君主論』をバイブルとして愛読していたと言われた。『君主論』は宮廷でも読まれ、ジャンティユは母国フランスがイタリヤ文化に毒されていくさまに耐えかね、国を憂う愛国心から『反マキアヴェリ論』を書いたのである。『反マキアヴェリ論』はいわゆる「君主の鑑」の流れをくむ為政者論で、ギリシア・ローマ時代から連綿と続いてきた君主のあるべく理想の姿をマキアヴェリ批判によって描いた書である。それは“hostile distortion”²⁶⁾と言われるほどマキアヴェリ批判に徹底している。ジャンティユはマキアヴェリの『君主論』『政略論』から50の格言を選び、それを批判するという形で論を進めている。その格言の中にダンのマキアヴェリ像がすべてではないにしろ見られることは驚くにあたらない。50の格言は第一部：助言、第二部：宗教、第三部：統治政策に分類され、理想の君主はこの三つを遵守して初めて国を治めることができることが論じられる。ジャンティユの『反マキアヴェリ論』を一言で要約するならば、マキアヴェリの理想君主はこれらの三つを無視し、専制君主術だけをマキアヴェリは論じているということである。随所に見られる tyrant, tyranny の語はジャンティユのマキアヴェリ観を如実に物語っている。この専制君主論者としてのマキアヴェリは当時の趨勢で、ジャンティユの時代のマキアヴェリの読みの典型でもある。では、ダンとジャンティユの接点はどこにあるのか。上に挙げたダンの『イグナティウスの秘密会議』におけるマキアヴェリ像が『反マキアヴェリ論』にによって説明されるのか。

『イグナティウスの秘密会議』にはマキアヴェリエリ自身によるマキアヴェリ像とロヨラによるマキアヴェリ像の二つがあったことはすでに指摘した。それらと『反マキアヴェリ論』との関係を見ると以下のようなになる。

「(1)マキアヴェリの成したことはジェズイットのそれと比べると「子供っぽい」が、マキアヴェリがジェズイットの悪の教義と実践を教えた。」

これについては『反マキアヴェリ論』に該当する箇所はない。この一節はジェズイット一派がいかに悪の限りをつくし、しかもマキアヴェリを凌駕する悪を実行しているを述べているにすぎない。ジェズイットは創始者イグナティウス・ロヨラを始め、マキアヴェリ以上にマキアヴェリ的な巧妙な教義（たとえば equivocation）を編みだし、プラーツは、Ignatian Machivelli なる語すら使用されたとを指摘している²⁷⁾。それほどジェズイットは、マキアヴェリ的否それ以上にマキアヴェリ的であり、そのようなジェズイットへの批判は当時の文献によく見られるところである。後半の一節のマキアヴェリがジェズイットの悪の教師であったという表現は当時一般に言いふるされたジェズイット批判の反映である。

「(2)マキアヴェリは「血の道」を歩み、キリスト教の犠牲よりも異教の血を用いた犠牲を好んだ。」

これに該当する表現は『反マキアヴェリ論』には見当たらないが、マキアヴェリがキリ

スト教よりも異教に好意的であったという表現はある。『反マキアヴェリ論』の第二部：宗教論はジャンティユが無神論者 (atheist) としてのマキアヴェリをキリスト教と対比させて論じているところであるが、序論でマキアヴェリの異教への憧れについて”...he [Machiavelli] preferreth the Religion of the Paynims before the Christian:”⁽²⁸⁾と述べている。(2)の内容はジャンティユよりはむしろマキアヴェリの『政略論』から取り入れられていると考えたほうがよい。『政略論』Ⅱ. 1に古代の犠牲に触れて次のような一節があるからである。

これに対して、古代人の宗教儀式には、見かけだおしとかげばけしさがなければいけないが、これに加えて犠牲の祭儀がとり行われていたのが特徴である。この祭儀には、血と残酷がつきもので、おびただしい獣を殺して犠牲に供したのであった⁽²⁹⁾。

(2)は明らかにこの『政略論』の反映である。

「(3)君主は宗教を偽ることによりいかに国家を奪い、逆に民衆が君主の圧政の下にあるときはいかにしてその君主を殺害できるかを教えた。その結果、マキアヴェリの教えに従った君主と民衆が続々と地獄に来るようになった。」

このマキアヴェリの主張については以下でも触れるが、ダンのマキアヴェリの読みの深さを示唆するものである。前半はジャンティユの無神論者としてのマキアヴェリ批判（『反マキアヴェリ論』第二部）にも見られるが、後半に関してはジャンティユにはこれに該当する表現はない。専制君主術論者としてのジャンティユのマキアヴェリ観からは当然のことである。この(3)は、前半が『君主論』、後半が『政略論』での共和制政体論に由来するのであろうが、ダンとはジャンティユと異なり、『政略論』のなかのマキアヴェリの共和制論を時代に先駆けて読み取っていたのである。ヒーリイは、この共和制主義の出典は『政略論』2巻2と3巻9にあると言っている⁽³⁰⁾。出典がどこかは断定できないが、ダンが共和制論者としてのマキアヴェリの一面を読み取っていたことは確かである。

このようにマキアヴェリ自身によるマキアヴェリ観にはジャンティユと直接対比できる点はない。上記の(3)はダンのマキアヴェリの直接の読みを示唆する一節であるが、重要なことは、マキアヴェリがそこでは自らを君主論者とも共和主義論者とも決めかねていないということである。これは以下のロヨラのマキアヴェリ観と比較した場合重要なマキアヴェリ観となっている。それでは、ロヨラから見たマキアヴェリ像とジャンティユとの関係はどうか。次にこれを見てみよう。

3

「(1)マキアヴェリはおべっか使いである。」

『反マキアヴェリ論』には真の友人とおべっか使いの違いを扱った箇所は第一部にあるが⁽³¹⁾、マキアヴェリがおべっか使いであるという表現はない。ロヨラがマキアヴェリをおべっか使いと批判したのは、マキアヴェリのサタン賛美が不十分で、ただお世辞を言っているにすぎないということである。お世辞を言う人は相手を馬鹿にするか教えるだけだとロヨラは考えているので、(1)はマキアヴェリを引き立て役にしてロヨラがマキアヴェリ以上におべっか使いであることを言いたいがために使った表現である。

「(2)マキアヴェリは生前中自分の知性だけを信じ、サタンに恩義を感じたりすることはなく、地獄の存在すら信じなかった。」

この(2)についても『反マキアヴェリ論』にこれに相当する言葉はない。ただ、「生前中自己の知性だけを信じ」に関しては、第一部で、マキアヴェリは君主に助言や助言機関を無視し、自己の知恵にのみ従うべきだと言っている表現はある。例えば、" he [a prince] ought to governe himselfe by his owne wisdom and Counsell, and that he cannot be better counselled than by himselfe. "⁽³²⁾あるいは "...he [a prince] will beleieve neither councill nor advice, but that comes out of his owne head."⁽³³⁾である。しかし、(2)のロヨラのマキアヴェリ批判は、いかにロヨラー派がサタンを思い起こさせる程の悪事を重ねているかをロヨラの口から言わせたいためにもってきた表現であろう。確かに、当時の文献を見ると、ジェズイット＝悪魔という図式はよく見られるところで⁽³⁴⁾、(2)の意図もジェズイットがいかに悪魔的であることを示したかったに他ならない。

「(3)マキアヴェリは神を否定した。」

これは、無神論者としてのマキアヴェリ観で、『反マキアヴェリ論』に頻出する言葉である。

「(4)マキアヴェリは、ローマ強皇はすべての災いの原因であり、災いの主導者であると確信している。」

これについては『反マキアヴェリ論』の第二部第六格言「ローマ教会はイタリアのすべての災いの原因である」のなかでジャンティユは次のように言っている。

...Italie, Rome, the Pope, and his seat, are truly the spring and fountaine of all de-spight of Religion, and the schoole of all impietie:⁽³⁵⁾

これは(2)にほぼ相当する表現であるが、しかし、『政略論』1. 12の次の言葉をふまえている。

その [イタリアの案寧秩序がローマ教会にはよっていない] 第一のものは、ローマ教皇庁の悪例にそまり、イタリアがまったく信仰心を失ってしまっていて、無限の災厄と底なしの大混乱に引きずりこまれてしまっているという事実である.....教会やその坊主のおかげで、われわれはイタリア人は、宗教もろくにもたずに、よこしまな生活にふ

けているというのである。さらにそればかりではなく、はるかに大きな不幸を教会や坊主のために受けている。それはイタリアの崩壊の原因となるものである。すなわち教会は、イタリアを昔からいままで一貫して分裂させてきたのである⁽³⁶⁾。

(4)はこの要約であると考えてよい。

「(5)マキアヴェリは抗道を掘ってもすぐに敵に見つけられる程で融通性もこうかつさもない。」

これについては、『反マキアヴェリ論』には典拠はない。ただ『政略論』2. 32に抗道についての以下のような記述はある。

.....また抗道を掘進めてくる方法に対しては、逆にこちらからも穴を掘っていくというやり方もある。そしてこの抗道を利用して武器やそのほかの道具を使って敵の侵入をくいとめるのである⁽³⁷⁾。

(4)は、ジェズイットがマキアヴェリよりもはるかにこうかつ、巧妙に種々の悪を犯していることを強調することを意図しており、ダンの創作も混ざっている。

「(6)マキアヴェリの著作には何も意味がなく、誰も彼を擁護しようとしない。」

これと関連して、『反マキアヴェリ論』の序論でジャンティユは次のように言っている。
I answer and will maintaine, that in all his writings, there is nothing of any value, that is his owne.⁽³⁸⁾

『反マキアヴェリ論』のなかから強いて(6)に相当する語句を見つけようとするならば、この言葉以外にはない。この(6)もジェズイットの著作にはマキアヴェリ以上の意味(否定的な)があることを言っているにすぎない。

「(7)マキアヴェリのほとんどの教えは古くさく、時代遅れである。」

これについては『反マキアヴェリ論』の序論に次の言葉がある。

And as for his precepts concerinig the militarie art...men doe not practice them, neither are they thought worthie of obsevation....⁽³⁹⁾

ジャンティユは、マキアヴェリの軍事術についてだけ言及しているが、内容は(7)の表現とほぼ同様である。

「(8)マキアヴェリの著作と行為はローマ教皇の破滅と破壊を目指している。」

これは上記(4)に通ずる批判で、『反マキアヴェリ論』にこれに相当する表現はない。

「(9)マキアヴェリは国家形態を変え、民衆から自由を奪い、すべての国家を破壊し、無理に君主国に変えようとしている。」

これは上記のマキアヴェリによる自我像(3)で、マキアヴェリが自らを君主論者と共和制論者のどちらにも限定しないで、二つの側面を示していたのと对象的に、ロヨラはマキア

ヴェリを君主論者・専制君主論者としてとらえている。言うまでもなくこれは『君主論』のマキアヴェリであり、当時の典型的なマキアヴェリ観である。『反マキアヴェリ論』は前述したように、マキアヴェリは tyranny, tyrant 術を教えていると徹底的に批判しているが、(9)に相当する表現をしいて『反マキアヴェリ論』に捜せば、次の言葉がある。

...it [sic.the books of Machiavell] took Faith from the prince; authoritie and majestie, from lawes; libertie from the people; and peace and concord from all persons,⁽⁴⁰⁾...

あるいは、tyranny とは何かについてジャンティユは次のように言っている。

...he [Machiavell] hath hath taken Maximes and rules altogether wicked, and hath builed upon them, not a Politicke, but a Tyrannicall science.⁽⁴¹⁾

...his [Machiavell's] scope and intent in his writings is nothing els, but to frame a true and perfect tyrannie.⁽⁴²⁾

「(10)マキアヴェリの著作はある場所で短期間のみ役に立つだけで、普遍性に欠けている。」

マキアヴェリがイタリア・フィレンツェしか見ていないという批判は『反マキアヴェリ論』にある。例えば、

...during his [Machiavell's] time, hee saw nothing but the brabblings and contentions of certaine Potentates of Italie, and certaine practises and policies of some cittizens of Florence.⁽⁴³⁾

『反マキアヴェリ論』にマキアヴェリの著作には普遍的な価値はないという表現はない。むしろジャンティユはマキアヴェリの教えがフランスで実践されていることを嘆いているほどである。

以上、『イグナティウスの秘密会議』のマキアヴェリによる自我像とロヨラによるマキアヴェリ像について、ジャンティユの『反マキアヴェリ論』との関係から見てきた。ジャンティユには上記のマキアヴェリ批判以外にも、(1)マキアヴェリはフィレンツェから追放された(2)彼は悪辣な生涯を送った(3)彼の教えに従えば巨額な富が得られる(4)彼の著作の悪い点は彼のもので、良い点はリヴィウス等から得ている、の4点があるが、これらはダンのマキアヴェリ像には見られない。ヒーリイは、ダンがジャンティユ神話の被害者ではなく、自ら直接マキアヴェリを読んでいたと言っているように、確かにそれを裏付ける描写もある。これまで見てきたマキアヴェリによる自我像、ロヨラによるマキアヴェリ像は『反マキアヴェリ論』なしでもダンが書けたかもしれないが、当時の stage Machiavelli, ジャンティユの『反マキアヴェリ論』, 及びマキアヴェリの著作を利用できたことは十分考えられる。悪の権化たるマキアヴェリよりもいかにジェズイットがまさっているかを読者に示したいために、ダンは誇張や戯画化によって手に入る資料を駆使しロヨラとジェズイットについて描いている。上記のロヨラのマキアヴェリへの反論を逆にすればすべてジェズイットにあてはまるのである。『イグナティウスの秘密会議』がそのようなジェズ

イット風刺であることを考えると一つの興味深い点が浮かび上がってくる。それは、マキアヴェリが君主論者、共和制論者として自らをサタンに売り込んでいるのに比べ、ロヨラがマキアヴェリを君主論者として決めつけていることである。専制政治術の教師としてのマキアヴェリ像以外に、暴君、暴政に反旗をひるがえし、暴君から自由を取り戻す術をもマキアヴェリは教えたという点である。上記のマキアヴェリの自我像の(3)で、ダンはマキアヴェリに次のように語らせていた。

君主は宗教を偽ることによっていかにして国家を奪い、逆に民衆は君主の圧政の下にあるときはいかにしてその君主を殺害できるかを教えた⁽⁴⁴⁾。

この一節からダンが君主論者と反君主論者（共和制論者）としてのマキアヴェリを知っていたことがわかる。ダン以前は君主論者としてのマキアヴェリ観が圧倒的であり、共和制論者としてのマキアヴェリ観は17世紀中頃から見られることを考えると⁽⁴⁵⁾、ダンの共和制論者としてのマキアヴェリ観言及は時代を先取りした読みであったと言える。ダンが『イグナティウスの秘密会議』を書いた1611年には共和制論者としてのマキアヴェリ観は皆無であったと言ってしまうのは言い過ぎであろうが、少なくともマキアヴェリの著作を直接読んでいなければ共和制論者としてのマキアヴェリ観には言及できなかったはずである。上に挙げた一節には二つのマキアヴェリ像が見られるが、それではダンがマキアヴェリをどのように見ていたのか。そもそも『イグナティウスの秘密会議』のマキアヴェリによる自我像とロヨラによるマキアヴェリ像からダンのマキアヴェリへの真意を読みとることができるのか。この問題を解くかぎはロヨラにある。ロヨラの『イグナティウスの秘密会議』における機能はすべての自称「革新家」に反論し、「革新家」よりもロヨラとジェズイットがいかに悪事を犯しているかを史実に合わせて述べることである。それゆえ、ロヨラに匹敵しうる人物が登場すればそれだけロヨラの反論のボルテージは上がり、ロヨラ一派の悪事が一気に自らの口から披露されることになる。ロヨラ一派への痛烈な風刺がこの手法により読者を啞然とさせる程の効果あげている。重要なことは、ロヨラは地獄においてより一層の「真理」を示す役割を担って登場しているということである。この反論方法は⁽⁴⁶⁾『イグナティウスの秘密会議』全体を通して見られるもので、それはマキアヴェリ登場前後の「革新家」達へのロヨラの反論を見れば明らかである。このような役割を果たすロヨラがマキアヴェリへの反論の一つとして次のような「真理」を示していることに注目し、これはロヨラの最後の切り札とも言うべきマキアヴェリへの反論で、ロヨラの力強い口調には作者ダンの何らかの意図が感じられると言っても言い過ぎではない。ロヨラは以下のようにマキアヴェリへ反論する。

しかし、一撃の下にマキアヴェリのサタンの秘密部屋入場の理由と希望のすべてを断ち切るために私 [ロヨラ] は次のことを断言し、言明する。つまり、彼 [マキアヴェリ] のすべての書物、すべての行為はそれによってローマ教皇の座の破滅と破壊のために道が準備されることに向かうだけであるということだ。というのは、国家の形態を変え、かくして民衆から……すべての自由を奪い、すべての統治術と国家を破壊し、すべての国家を君主国家に余儀なく至らせる以外、他のいかなることにマキアヴェリは取り組もうとしているのか⁴⁷⁾。

ここでロヨラは明確にマキアヴェリを専制君主論者としてだけしかとらえていない。マキアヴェリ自身が自らを君主論者とも共和制論者ともどちらとも決めかねなかった態度と異なり、ロヨラが専制君主論者としてマキアヴェリをみなしている。これは『反マキアヴェリ論』のマキアヴェリ観に通ずる見方である。とすれば、ダンのロヨラへの皮肉はロヨラこそが『反マキアヴェリ論』からマキアヴェリ像を引き出しているということである。もしくは、当時一般に流布していたマキアヴェリに関する伝説・伝聞によってマキアヴェリを批判するロヨラをダンが皮肉っていると考えられる。物知り顔然としてあらゆることをしゃべりまくるロヨラは、いかに無知であるかをダンがロヨラのマキアヴェリ観を通して揶揄している。(ちなみにジャンティユは、マキアヴェリは無知であると言っている⁴⁸⁾。)ロヨラが言うほど簡単にマキアヴェリを決めつけることはできない。ロヨラが強引にマキアヴェリを専制君主論者とみなすが、ジャンティユの『反マキアヴェリ論』は個人的なマキアヴェリへの感情が強く、とても公平にマキアヴェリを評価しているとは言えない。むしろ、マキアヴェリ自身の自我像が真意に近い。しかし、それとてマキアヴェリは自身をいずれかに断定することを避け、中立的な立場を示しているにすぎない。マキアヴェリの著作は一般的には『君主論』で君主論を、『政略論』で共和制論を述べていると言われ、マキアヴェリの実意はどこにあるのか理解できなかつと言われていた。マキアヴェリ自身による自我像はそのような当時のマキアヴェリ評価の反映であろうし、また、ダン自身のマキアヴェリ評価の実意でもあったのであろう。そのような状況のなかでロヨラがマキアヴェリをあえて君主論者として断定した背景にはジェズイットの反君主の立場があり、それを強く打ち出したいためにダンがロヨラに盲目的にマキアヴェリを君主論者とみなさせたとも考えられる。そしてロヨラの一方向的なマキアヴェリ観によってロヨラの無知振りを自らの口から暴露させているのである。ロヨラは『イグナティウスの秘密会議』においては真理を表す人物として登場していることは既に指摘したが、ダンがロヨラをしてマキアヴェリを君主論者として断定させている裏には当時のマキアヴェリへの一般的な読みがあった。ロヨラはそれに惑わされ、マキアヴェリを解釈し、それを真理として述べている。ダンからすればそれはあくまでもマキアヴェリ伝説・伝聞からくるもので真理とは言え

ず、通俗的なマキアヴェリ観にすぎない。ロヨラの君主論者としてのマキアヴェリ観はダンの時代にあっては「真理」であった。しかし、真のマキアヴェリ像はそうではないのだとダンがマキアヴェリ自身によって君主論者、共和制論者をもってこさせることによって示唆しているのである。伝説・伝聞に惑わされたロヨラの君主論者としてのマキアヴェリ観に我々はダンの痛烈な風刺の一面を見るのである。

4

ロヨラのマキアヴェリ観は『イグナティウスの秘密会議』における重要なテーマである君主制擁護者としてのダンを考慮に入れると極めて意味ある表現となっている。ジェームズ一世擁護派の一人としてまた英国の現体制維持者の一人としてのダンから見れば、ロヨラのマキアヴェリ観はマキアヴェリの反ローマ教会と合わせてダンにとっては少しも否定されるものでなく、むしろ歓迎されるべきものである。ロヨラのマキアヴェリ観に我々はダンのいかなる態度を読みとればよいのか。ジェズイットの反君主の見解と対立させるために意図的にロヨラにマキアヴェリを君主論者として決めつけさせたとも考えられるが、既に触れたロヨラが果たす機能からするとそう簡単にはいかない。ダンがマキアヴェリをロヨラの口を通して君主論者として見なしているが、果たして君主論者としてのマキアヴェリを高く評価していたのであろうか。上で見たように、ロヨラはマキアヴェリへの反論のなかで「マキアヴェリの著作は意味がなく、誰も彼を擁護しようとしなさい」とか「ほとんどすべてのマキアヴェリの教えは古くさく、時代遅れである」とか更には「マキアヴェリの著作はある場所で短期間しか役にたつだけで、書かれた所でのみ有効あらしめよ」とマキアヴェリの著作について触れ、マキアヴェリの見解がイタリアでしか適応できないと言っているからである。確かにダンがマキアヴェリを君主論者としてみなしていたが、それはジェームズ一世の英国には適応できないものと考えていた。『君主論』を読めば明らかのように、マキアヴェリの理想とする君主は *virtù* (実力) を兼ね備え、判断力に富み、自国の維持のためにはいかなる手段も許される人物であり、自国内の無秩序と外敵に脅かされているイタリアを「新しい国家」へと統一していく救世主であり、そのモデルがチェザーレ・ボルジアであったことはよく知られている。ダンが、ジェームズ一世の英国とマキアヴェリのイタリアではそもそも国情が違うのだということを考慮に入れていたのであろう。ジェームズ一世王朝はマキアヴェリが嘆いたイタリアとは異なり、絶対王政の下で国家は一応は安定している。とりたてて、マキアヴェリの言う「新しい君主」を待望する必要はなく、「新しい君主」論を主張すれば、ジェームズ一世を否定することになる。ダンが、マキアヴェリを君主論者としてみなしていながらもそれ程マキアヴェリを高く評価はしていなかったと思われる。何よりも政治の現実を冷徹な眼でみつめ、目的のためにはどんな手段も許されると説いたマキアヴェリにダンは違和感を覚えたにちがいない。それが誇張

されてさまざまな形で劇で描かれ、マキアヴェリ=悪という図式が一般化されていた時代でいかにマキアヴェリの著作を自ら読んでいたとしてもその図式を変えることはむずかしい。例え変えたとしても一般の人々に受け入れられるのは更に困難である。道徳と無関係なマキアヴェリの君主観と異なり、ダンは政治を道徳と切り離すことはできなかった。これは、ジェームズ一世を悩ませていたジェズイットが批判された理由でもあった。『君主論』や『政略論』に類出する反道徳的・非道徳的行為を君主に勧めるマキアヴェリにダンはどうしても賛同できなかったはずである。若い頃書いた詩のなかでダンは時代に挑戦するような内容の詩を多く書き、時代を先取りする革新的な詩人と言われたが、実は政治と道徳を切りはなすことができない伝統的な価値観に囚われた人物であった。また、virtùを有する「新しい君主」は王権神授説を唱えるジェームズ一世の君主観とは似ても似つかぬ人物であり、どうしても受け入れ難くなっていく。その他にも、『君主論』や『政略論』でのマキアヴェリの「民衆」の評価や「法」遵守強調はジェームズ一世の考えとは著しく異なるところであり、ジェームズ一世擁護者のダンからすればこれらも容認できなかった点であった。ダンは、彼の同時代人とは異なり、直接マキアヴェリの著作を読んでいて、そしてマキアヴェリに君主論者と共和制論者の二面を読みとっていた。その意味でダンは、彼の同時代人とは異なり、数少ないマキアヴェリの真の読者であったということが言える。ダンは、「マキアヴェリ伝説」なるものを知っていたとは思いますが、単に「マキアヴェリ伝説」のみに基づかず、彼なりに『君主論』と『政略論』を読み、彼のマキアヴェリ観を『イグナティウスの秘密会議』で述べている。そしてマキアヴェリの見解は英国には適応できないと考えていた。とはいえ、『イグナティウスの秘密会議』のサタンとロヨラの関係はマキアヴェリ的である。地獄という王国を正統的支配者でないマキアヴェリ以上にマキアヴェリ的なロヨラがあれこれ策を弄し、王国を狙っている。これはまさしくマキアヴェリの世界である。ダンはマキアヴェリの著作から何らかのヒントを得て、作りあげたといっても過言ではない。両者の関係をマキアヴェリ的に考えると、王国の支配者としてのサタンとそれを奪おうとするロヨラがいかに非難され、批判されるべきかが明らかになる。サタンは一国の支配者としては余りにも優柔不断しすぎ、決断力にかけている。他方、王国をねらうロヨラは言わば篡奪者である。篡奪者を待ち受けるのは自らの失墜である。ダンは、マキアヴェリの教義はイタリアにしか適応できず、普遍的価値は有していないとロヨラを通して述べていたが、サタンとロヨラの関係がマキアヴェリからも解釈できるのは単なる偶然ではあるまい。マキアヴェリ的悪漢がマキアヴェリに由来するだけでなくセネカや英国固有の道徳劇等が混ざりあい、出来上がったと指摘する人もおり、ダンのサタンとロヨラの関係も一口にマキアヴェリからヒントを得て作ったとは言えず、ダンはマキアヴェリ的悪漢に接する機会是他にもあったとすることができる。しかし、これまで見てきた『君主論』『政略論』のエコーが『イグナティウスの秘密会議』に見られることを考え

るとサタンとロヨラの関係にアレゴリカルにマキアヴェリの影響を見ざるをえない。『イグナティウスの秘密会議』におけるダンの意図の一つは、ロヨラがいかにマキアヴェリ以上にマキアヴェリ的な人物であるかを徹底した風刺で描き出すことであつたということを考えて、ロヨラとサタンの関係にマキアヴェリの世界が垣間見ることができるのは当然のことかもしれない。

注

- (1) Edward Meyer, *Machiavelli and the Elizabethan Drama* (1897; New York: Reprint, 1969) xi.
- (2) 本論で使用する『イグナティウスの秘密会議』のテキストは T. S. Healy ed. *John Donne: Ignatius His Conclave* (Oxford: Clarendon Press, 1969) で、以下本文からの引用はページ数で明記する。
- (3) マキアヴェリの科白は Healy, 25-31である。
- (4) ロヨラのマキアヴェリへの反論は Healy, 31-63である。
- (5) Healy, 25.
- (6) Healy, 27.
- (7) Healy, 29.
- (8) Healy, 29-31.
- (9) Healy, 33.
- (10) Healy, 33.
- (11) Healy, 33.
- (12) Healy, 47.
- (13) Healy, 53.
- (14) Healy, 53.
- (15) Healy, 55.
- (16) Healy, 55.
- (17) Healy, 55-57.
- (18) Healy, 63.
- (19) Meyer, 22, 及び Mario Praz, *The Flaming Heart* (New York: The Norton Library, 1973), 128.
- (20) 本論で使用するテキストは Innocent Gentillet, *A Discourse Vpon the Meanes of VVell Governing* (1602; New York: Da Capo Press: Reprint, 1969) で、以下本文からの引用はページ数で明記する。
- (21) Meyer, x.
- (22) Praz, 94.
- (23) Felix Raab, *The English Face of Machiavelli* (London: Routledge, 1964), 52-3.
- (24) Victoria Kahn, *Machiavellian Rhetoric* (New Jersey: Princeton UP, 1994), 94-95.
- (25) Healy, xxxiii.
- (26) Raab, 56.
- (27) Praz, 131.
- (28) Gentillet, 76.

- (29) 永井三明訳『政略論』（東京：中央公論社，1966），362.
- (30) Healy, xxxiii.
- (31) Gentillet, 36.
- (32) Gentillet, 4.
- (33) Gentillet, 4.
- (34) Praz, 130-1を参照。
- (35) Gentillet, 128.
- (36) マキアヴェリ，『政略論』，215.
- (37) マキアヴェリ，『政略論』，480.
- (38) Gentillet, The Preface, A iii.
- (39) Gentillet, The Preface, A iii.
- (40) Gentillet, The Epistle Dedicatorie, iii.
- (41) Gentillet, The Preface, A ii.
- (42) Gentillet, The Preface, A ii.
- (43) Gentillet, The Preface, A ii.
- (44) Healy, 29-31.
- (45) Raab, 168-75及びJ. G. A. Pocock, *The Machiavellian Moment* (New Jersey: Princeton UP, 1975) chapters x, xi 参照。Markku Peltonen, *Classical Humanism and Republicanism in English Political Thought 1570-1640* (Cambridge: Cambridge UP, 1995) 74も参照。Peltonenは、共和制論者としてのマキアヴェリ観は1590年代にあったと言っている，
- (46) 'devil's advocate'としてのロヨラと同じ手法が *The Sweeneyad* という T. S. Eliot を風刺した匿名の劇のなかで使用されている。(Gilbert Highet, *The Anatomy of Satire* [New Jersey: Princeton UP, 1962] 126参照。)
- (47) Healy, 55-57.
- (48) Gentillet, The Preface, A ii.